

世界をみつめて4

「吾が輩は卒論である」—ジョヴァンニ・パピーニに捧ぐ

橋本 勝雄

吾が輩は卒論である。名前はまだ無い。勿論、本文も無ければ注釈も文献も無い、まだ一行も書かれていない。これはまずいのではないか。

これが猫なら、名は無くとも気楽な野良猫暮らしをするか、どこかの家に飼われて名づけられるものだ。吾が輩は文字としてさえ存在していないのだから、心もとないこと甚だしい。

これまでのんびり暮らしてきたが、締め切りまであと一か月、流石に少々心配になってきた。

兎に角、いそいで書き手を探さねば、と四条葛野大路できょろきょろしていると、いきなり肩を叩かれた。

「おい君、学生を探してるのかい？」

振りむくと、そこに立っていたのは、完成した一冊の卒論だ。題名から注釈まで書き上げられ、こざれいな表紙がついている。題名『ガッルーラの謎歌の伝承に関する研究』は意味不明だが、なにより吾が輩が驚いたのは、締め切りまで一か月というこの時期に仕上がっている卒論に初めて遭ったからだ。

吾が輩がこれまで出会った卒論たちは、題名は立派なくせに本文は冒頭の5行で立ち止まったままの者、文献資料を集めすぎて読む気がなくなった者、テーマが二転三転した挙句に自分が何者かを見失った者、外国語で書こうとして失語症に陥った者、どれも完成には程遠い連中ばかり。

吾が輩にしても、11月のこの時期までろくな暮らしをしてこなかったのだから、他人のことをとやかく云えた身ではない。

人間共は知らないようだが、実際には、学生が卒論を書くのではなく、卒論が学生を見つけて書かせているのである。だから卒論としては、いい学生を探すことが必須条件なのだ。

ガッルーラ氏が語るには、最近の世間では、先生が学生に卒論を書かせるさえと云われているらしい。

氏曰く、「学生に卒論を『書かせる』なんて、

どんなに優秀な先生にもできやしない。本当のところ、学生を探す手間を面倒くさがった卒論が、先生に『書かせている』のさ」

我々卒論にとって、きちんと書いてくれる学生を見つけるのは存在にかかわる、まさに死活問題だ。卒論が無くて学生は生きていける。

「まあ、この時期にはたいていの卒論が学生をキープしているから、今からいいのを見つけるのは難しいだろう」とガッルーラ氏。

「妙な学生に出くわして、酷い目に遭った卒論なんていくらでもいる。締め切り間際で文字通り尻切れトンボにされたり、文字数稼ぎに怪しげなコピペを詰め込まれて不格好に膨れあがったり、コンピュータのファイルの山で遭難したり。慌てずに、しっかり書いてくれる学生を探したらいいじゃないか」

「ガッルーラさん、貴方は自分が出来上がっているから、そんな気楽なことが云えるのでしょう。吾が輩は、どうしたって書いてもらわないと困るんです」と、思わずむっとした言葉が口から出た。

彼の目に少し寂しげな翳が浮かんだ。

「書いてもらってどうする？ 書きあげられた卒論がそのあとどんな扱いをされるのかご存じだろう。印刷され綴じられて、提出される。で、それから？」

「書き手を見つけるより読み手を見つけるほうがずっと大変なんだ。書きあげてしまえば、自分の卒論を読み返す学生なんていやしない。ごみ箱に投げこまれるか、運がよくても本棚で埃をかぶるのがせいぜいさ。たまに読んでくれる学生がいたとして、自分の卒論を書くため、その卒論が読みたくて読むわけじゃない。そんなのに耐えられるか？ 完成した論文は修正も追加もできない。こうやって自由に出歩くこともできない。死んでも同然さ」

それならどうして貴方は、と云いかけて吾が輩は思いだした。かつて、提出直前に学生の手の上から逃げだした卒論がいたという噂を。

はしもと かつお（准教授・イタリア文学）